

第10章 都留の祭り ――お天王さん

社会調査・地域調査B 「祭りと伝統行事」班 お天王さんグループ

メンバー： 児嶋隆志 齋藤淳悟

10.1 はじめに

問題関心

全国各地に祭りがあるように、この都留市にも「八朔祭り」「お天王さん」という祭りがある。祭りには、その地域の風土や人びとの暮らしの特徴が表れるといえよう。そうであるならば、その都留の祭りを知ることで、この地域の特徴や人びとの暮らしなどについて理解を深めることができるであろう。それによって、われわれ調査班メンバーは都留という地域についての新たな発見を得ることができるのではないかと思う。

調査項目

- * 「お天王さん」祭りの起源（始まったきっかけ）と歴史
- * 京都の祇園祭との関連性
- * 神輿はどのようなコースを回るのか、また毎年コースは決まっているのか
- * 祭りの世話人・総行司、お囃子の奏者などはどのように決めるのか
- * 各町の祭りの運営組織はどのようなになっているのか
- * 祭りの準備や練習はいつごろから始まるのか

調査方法

文献調査によって知りえた情報を手がかりに、インターネットの検索や、郷土史研究家へのインタビュー調査によって理解を深めた。

活動記録

- 8月24, 25日： 市立図書館で文献調査
- 9月17, 18日： 市立図書館で文献調査
- 9月21日： 市役所を訪問し、資料収集
- 9月22日： 「ミュージアム都留」訪問
- 9月27日： 大学図書館で文献調査とインターネットによる情報収集活動
- 9月28, 29日： 今後の活動方針についての話し合い
- 10月13日： インタビュー依頼文書類の作成と発送
- 10月22日： インタビュー調査に向けての事前準備、インタビュー・ガイドの作成
- 10月28日： インタビュー調査の実施
- 1月19日～： 報告書原稿の作成

10.2 「お天王さん」祭りの概要

毎年7月15日に行われている「御嶽神社」の祇園祭、通称「お天王さん」は、須佐之男命（すさのおのみこと）を祭神として、京都の祇園祭りに範をとって神輿が町内を巡行する祭りである。この御嶽神社はもともと、横町、田町、弁天町（いずれも旧町名）の氏神であったが、いまは栄町、寿町、城北町、幸町を加えて7町により祭りが行なわれている。祭り全体を取り仕切る「総行司」は城北町、幸町を除く5町が輪番制で担当する。神輿は、須佐之男命の御魂を入れる荒れ神輿で、祝酒の勢を借りて町内を練って廻り、近在で名を成していたといわれている。また、終戦前までは田原神社まで一気に走り抜けたとのことである。その荒々しさのために、毎年のようにけが人が続出したが、近年の祭りは昔に比べるとおとなしいものとなったそうである。



10.3 インタビュー調査

「お天王さん」祭りについてわれわれ調査班は、都留市の郷土史研究家で、田町地区の氏子総代でもあられる清水正賢さんにインタビュー調査を行った。

10.3.1 調査の実施方法

対象者： 都留市郷土研究会 清水正賢さん
実施日時： 2004年10月28日（木曜日） 15:00～18:00
場所： 清水さんご自宅
質問者： B「祭りと伝統行事」班 お天王さんグループ 2名（児嶋・齋藤）

10.3.2 インタビュー記録

祭りの起源

祭りの起源は、口頭で伝わっているものが多く古文書のような文献がないために、よくわからない点が多い。「お天王祭」の名でこの祭りについての記述が初めて文献に表れるのが明治5年のことである。京都の祇園祭とは直接的な関連性はない。お天王さん祭りは「牛頭天王祭」と呼ばれることもある。「牛頭天王」とは、古代中国において疫病などから人びとを守った厄除けの神様で、中国の人びとはこの神様を崇め、祭りを開いたとされている。なぜこの牛頭天王の名が都留の地に伝来したかは不明である。

お天王さんは、御嶽神社に奉られている豊玉姫命（とよたまひめのみこと）、須佐之男尊（すさのおのみこと）、少彦名命（すくなひこのみこと）を祭神としているのだが、現在の御嶽神社の建物は元禄時代の大火災を皮切りに、大正12年8月31日、昭和24年5月13日と計3回焼失している。この大

正 12 年 8 月 31 日とは関東大震災の前日であり、何か因縁のようなものを感じずにはいられない…。

現在は、横町、田町、弁天町、栄町、寿町、城北町、幸町の 7 町の地区内で行われている。もともとは横町、田町、弁天町の 3 町で運営していたが、人口増加によって横町から栄町、田町から寿町が分かれて 5 町となった。その後、さらなる人口増加に伴い、栄町から城北町・幸町の 2 町が加わり現在に至っている。それにより、神輿の巡行コースも増え、祭りの様子も少しずつ変わっていった。たとえば、町の数の増加に伴って祭りの規模が拡大したため、一部の場所では交通規制により神輿を担ぐことができなくなり、神輿をトラックで運ぶようになった。そのため、昔に比べると荒々しさがなくなった。

祭りの運営と一連の流れ

前述したように、現在は 7 町内で祭りが行われているが、祭りの指揮を執っているのは城北町、幸町を除いた 5 町（横町、田町、弁天町、栄町、寿町）それぞれの氏子総代である（ちなみに今回インタビューに協力してくださった清水氏は、田町の氏子総代である）。その 5 町から氏子総代と「総行司（惣行司）」を出している。実際に祭りの運営を取り仕切っているのは総行司であり、氏子総代はあくまでも相談役である。総行司の下にはさらに「世話役」という役職があり、総行司の指揮のもとで祭りの運営を行っている。

祭りの流れを順に追っていくと、まず、7 月 1 日に神社から神輿へ祭神の魂を移す。これは、「御移徒」（ごいと）と呼ばれている。その後、7 月の 1 日から 15 日までの間、現在、山梨信用金庫の駐車場となっている場所に設置された「御仮屋」（おかりや）と呼ばれるものにうつされ、祭り当日まで安置される。祭りの準備は、基本的には前日から当日にかけて行われるが、準備といっても祭りを盛り上げるための飲食物を用意する程度のもので、祭りの運営自体に関する準備は総行司によって行われる。前述したように、神輿の移動にトラックを使うところもあるが、基本的には神輿は担ぎ手に担がれて各町内を巡行する。昔は夜中の 10 時近くまで続いていたようであるが、現在では夕方の 5 時ごろには終わるようになっている。そして、祭りの後には「座敷払い」と呼ばれる盛大な打ち上げが行われ、みんなで祭りの労をねぎらい合う。近年は祭典を日曜日（7 月 15 日前の直近日）に執行するようになった。

昨今の悩み

祭りに参加する地区が増えたことに伴い、祭りの規模そのものが拡大しているが、そのほかにも近年いくつかの問題が生まれてきている。たとえば、祭りのお囃子の練習は、祭りの始まる 1 ヶ月から 1 ヶ月半前に始まる。祭りのお囃子は、おもに各町の小学生や中学生たちによって担われているが、昨今、そのお囃子を演じることのできる子どもたちが減ってきている。これは、「お囃子をやってみよう」という子供たちが減ってきているということもあるのだろうが、それよりも問題なのが、各町内にお囃子を教えられる人がいないことである。各町ごとに神輿の担ぎ手を出しているように、お囃子もその町ごとに出すのだが、お囃子の指導ができる人が不足しているために、やむを得ずカセットテープを使ってお囃子を流している町もあるようだ。

参考資料

都留市伝統文化保存実行委員会・市立図書館協力委員会郷土研究部会、2004、『平成 15 年度ふるさと文化再興事業 受け継がれる祭りの心』（ビデオ資料）、都留市